

# 白井市印西牧野馬除土手

—千葉県北部地区中48(桜台)画地埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28年3月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

しろ い し いん ざい まき の ま よけ ど て  
白井市印西牧野馬除土手

—千葉北部地区中48(桜台)画地理蔵文化財発掘調査報告書—



## 序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第755集として、独立行政法人都市再生機構の千葉北部地区中48（桜台）画地開発関連事業に伴って実施した白井市印西牧野馬除土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世の小金五牧の中のひとつである印西牧に関連する野馬除土手などの遺構が検出されており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団  
理 事 長 堀 田 弘 文

## 凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区中48（桜台）画地開発関連事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県白井市桜台五丁目738-6の一部ほかにかに所在する印西牧野馬除土手（遺跡コード232-002）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、整理課長岸本雅人の指導のもと、整理課主任上席文化財主事麻生正信が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、白井市教育委員会、印西市教育委員会、戸谷敦司氏、鈴木圭一氏、杉山祐一氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
  - 第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「白井」(NI-54-19-14-3)
  - 第2図 参謀本部陸軍部測量局作成（佐倉近傍第21・22号）(1/20,000)  
第一軍管地方迅速図「白井橋本村」・「白井村」・「取手驛」・「龍筒寄村」  
(明治14・15年測量・明治20年発行)
  - 第3図 白井市都市計画基本図10・11・15・16 (1/2,500)  
(平成17年測量・平成26年修正)
- 8 本書で使用した航空写真は、下記のとおりである。
  - 図版1 国土地理院提供 USA-M44-A-5VT-131（昭和21年2月米軍撮影）
- 9 本書で使用した座標値は、すべて日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

## 本文目次

序 文

凡 例

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
第2章 遺構と遺物	8
第3章 まとめ	18
報告書抄録	巻末

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第8図 トレンチ配置図(3)	12
第2図 小金印西牧範囲図	5	第9図 トレンチ内状況図(1)	15
第3図 印西牧野馬除土手周辺地形図	7	第10図 トレンチ内状況図(2)	16
第4図 トレンチ14内Ⅲ層 旧石器遺物出土状況図	8	第11図 トレンチ内状況図(3)	18
第5図 石器実測図	8	第12図 トレンチ土層断面図	19
第6図 トレンチ配置図(1)	10	第13図 トレンチ内土坑実測図 SK001・002・003	20
第7図 トレンチ配置図(2)	11	第14図 印西牧野馬除土手地形測量図	23

## 図版目次

- 図版1 印西牧野馬除土手航空写真
- 図版2 調査前風景(1) トレンチ1付近  
調査前風景(2) トレンチ3付近  
調査前風景(3) トレンチ6付近
- 図版3 調査前風景(4) トレンチ13付近  
調査前風景(5) 澤山の泉湧水地点  
調査前風景(6) 先神の湧水地点
- 図版4 調査前風景(7) トレンチ4付近  
調査前風景(8) トレンチ7付近  
調査前風景(9) トレンチ10付近  
調査前風景(10) トレンチ12付近  
調査前風景(11) トレンチ14付近  
シシ穴状土坑列の凹地  
調査前風景(12) 先神の湧水地点へ  
続く地区外の野馬除土手  
トレンチ1 全景  
トレンチ1 溝土層断面(SD001)
- 図版5 トレンチ1 溝土層断面(SD001)  
トレンチ2 土層断面  
トレンチ3 土層断面  
トレンチ4 土層断面  
トレンチ5 土層断面  
トレンチ6 全景  
トレンチ6 溝土層断面(SD002)  
トレンチ7 土層断面
- 図版6 トレンチ8 土層断面  
トレンチ9 土層断面  
トレンチ10 土層断面(SK005検出)
- トレンチ11 全景  
トレンチ11 野馬堀土層断面(SD003)  
トレンチ11 道跡土層断面  
(SD004 a~f)  
トレンチ11 陥穴状土坑全景(SK001)  
トレンチ11 陥穴状土坑土層断面  
(SK001)
- 図版7 トレンチ12 道跡土層断面  
(SD004 a~f)  
トレンチ12 土層断面  
トレンチ12 野馬除土手土層断面  
(SX003)  
トレンチ13 土層断面  
トレンチ14 シシ穴状土坑全景(SK003)  
トレンチ14 道跡土層断面  
(SD004 a~f)  
トレンチ14 野馬堀土層断面(SD003)  
トレンチ14 シシ穴状土坑土層断面  
(SK003)
- 図版8 トレンチ15 シシ穴状土坑全景(SK003)  
トレンチ15 シシ穴状土坑土層断面  
(SK002)  
トレンチ14・15・16 全景  
調査後風景 トレンチ14付近  
出土遺物 トレンチ14内出土Ⅲ層  
旧石器時代石器

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

印西牧野馬除土手の調査は、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部の千葉北部地区中48（桜台）画地開発関連事業に伴うもので、今回、開発区域との境界にある野馬除土手を含む一部範囲が工事の影響を受ける事業として計画された。千葉県教育員会と独立行政法人都市再生機構との間でその取り扱いについて、慎重に協議した結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

印西牧野馬除土手の発掘調査と整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。

平成27年度

発掘作業

期 間 平成27年12月1日～平成27年12月28日

組 織 文化財センター長 小久貫隆史

整理課長 岸本雅人

担当職員 主任上席文化財主事 麻生正信

内 容 上層 190㎡／6,600㎡（確認調査）

整理作業

期 間 平成28年1月4日～平成28年1月29日

組 織 文化財センター長 小久貫隆史

整理課長 岸本雅人

担当職員 主任上席文化財主事 麻生正信

内 容 水洗・注記から報告書刊行

### 2 調査の方法

調査に先立って委託による地形測量を実施し、1/500の地形測量図を作成した。発掘調査は、調査対象範囲全域に公共座標に合わせた通常のグリッドの設定は行わず、野馬除土手に直交して比較的樹木が少なく遺存状態の良い地点を選び、当初、幅2m、長さ5mの7本、長さ15mの4本の計11本のトレンチを設定した。しかし、伐木を伴わない調査計画であり、樹木の繁茂状況から幅2m、5m及び15mの長さのトレンチ設定が困難な地点もあったため、トレンチの幅及び長さ、本数を適宜変更した。座標杭はトレンチの起点となる箇所に11点設定し、公共座標にその座標を落として位置がわかるようにした。なお、当該地周辺の測量成果は独立行政法人都市再生機構から提供を受け、座標値はすべて日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

地形測量対象面積は、6,600㎡、トレンチ調査面積は190㎡である。



1:25,000

1000m

第1図 遺跡位置図

千代市

千代市



## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境（第1・3図、図版1）

小金五牧の内、最東部に位置する印西牧は、下総台地北部の白井市と印西市にまたがって所在する。

白井市の北側は利根川を介して、茨城県に接し、また東方には印旛沼、西方には手賀沼と三方を水に囲まれている。白井市域の大半は、地形的には下総台地上に含まれるが、調査地も印旛沼に流入する神崎川の支谷が南東から入り込んで開析した谷津に面した南東側に延びる標高20m～25mの舌状台地上に所在する。今回調査した1印西牧野馬除土手は、この印西牧の南側の境界の一部である。

周辺には、印西牧に関する野馬除土手や野馬堀が点在する。調査地点の北側には、現在白井市桜台小学校・中学校があるが、かつて敷地内に野馬除土手が所在していた。現在では、学校の北側の交差点から、北西方向に長さ100m、幅1.5m、高さ1mほどの野馬除土手が、白井市十余一清戸道西と清戸北割の字境に沿って遺存している。さらに西側の船橋カントリークラブ内にもかつて敷地内に野馬除土手が所在していた。その場所は、清戸北割と清戸東原の字境、清戸西割と清戸新山の字境、清戸先上台と花堀込の字境に沿っていた。現況では、大同年間（806年～810年）に起こった干ばつによる雨乞い祈願に由来する龍神信仰に基づく、龍神と弁財天が祀られ、ゴルフ場敷地内の谷頭の湧水地点が昭和42（1967）年に県指定史跡「清戸の泉」となって残っている。また、白井市十余一二軒茶屋から印西市木下に通じる街道の西側に、長さ800m、幅1.5m、高さ1mほどの野馬除土手が断続的に遺存している。

### 2 歴史的環境（第2・14図）

周辺の遺跡を見ると、旧石器時代は、先神谷津の湧水点を挟んだ西側の台地で、道路整備に伴い昭和62（1987）年度及び平成4（1992）年度に2清戸1遺跡が調査され、石器が8点出土している。石材は、メノウ、珪質頁岩、凝灰岩を使用している。出土層位は、立川ローム層Ⅳ～Ⅴ層である。

縄文時代では、北東側の谷奥に3一本桜遺跡、4一本桜南遺跡等が所在し、早期～前期の遺物が出土している。南西側の台地先端部には、5谷田木曾地遺跡が所在し、早期～後期の遺物が出土している。

弥生時代～奈良・平安時代は、北東側に4一本桜南遺跡、南西側に2清戸1遺跡、5谷田木曾地遺跡が所在し、集落が営まれている。

印西牧野馬除土手が所在する舌状台地を含む北総台地によく見られる平坦な地形を利用した牧の形成が、古代より行われてきたが、中世・近世を通じて、本格的な牧の整備は江戸時代に入ってからとなる。

『延喜式』（927年）には、高津馬牧他五牧が設置されたことが記述されている。中世には、永祿期（1558年～1570年）に千葉氏の支配下にあった下総牧や、小金城を本拠とした高城氏も小金原を支配し牧を営んでいた記述が見られる。江戸幕府は、慶長19（1614）年に江戸周辺に軍馬養成と使役馬の供給を目的として、下総に小金・佐倉の二牧を幕府直轄の牧として設置した。他には安房に嶺岡牧、駿河に愛鷹牧が整備された。印西牧が属する小金牧は、元和2（1616）年に牧の実質的管理者である牧士を任命し、牧の設置からさほど隔たらない時期に、経営基盤の整備が行われている。

小金牧は、現在の白井市・印西市にまたがり、当初中野牧・上野牧・下野牧・高田台牧・印西牧・庄内牧・一本柗牧の七牧が設置されたが、一本柗牧は中野牧に吸収され、寛文・延宝期（1661年～1681年）から新田開発が活発化してくる。享保7（1722）年には細分拡充され、中野牧・上野牧・下野牧・高田台牧・印西牧・庄内牧の六牧から、庄内牧が廃止され、五牧となった。享保7（1722）年、五牧で面積

10.426ha、馬数1,029頭が記録されている。うち印西牧は面積785ha、馬数45頭である。印西牧は、他の牧とは離れて孤立していた。明治2（1869）年の印西牧絵図には、縮小された牧の範囲が記載されている。牧を維持・管理する野付村は、名内村、平塚村、白幡村、浦部村、小倉村、和泉村、多々羅田村、神々廻村、清戸村、谷田村、武西村、安養寺村、戸神村、布佐村の14村で構成されていた。

小金五牧は明治2（1869）年以降、武士である土族の帰農のために開墾地となり、1番目の「初富」から始まり、順番に地名がつけられ、当印西牧では11番目の「十余一」の名前が与えられ、開墾に伴い牧関連遺構は徐々にその数を減らしている。明治20（1887）年の陸軍迅速図には残った野馬除土手の一部が記載されている。

近年、ニュータウン開発により多くの牧関連遺構が消滅しつつある中、印西市では、平成16（2004）年市指定史跡として「泉新田大木戸野馬驅遺跡」を指定し、保存している。これは、明治2（1869）年の印西牧絵図にある草深新田と印西牧とを区切る野馬土手で、木戸が併設されていた。現住所は、印西市草深字大木戸である。土手は北東の鹿黒村と南西の多々羅田村の両谷頭を結ぶ線上に設置され、東側は草深新田、西側は印西牧となり、牧の東側の境にあたる。

牧を区切っていた土手は、野馬土手・野馬除土手等と呼称され、土手を失い堀のみが顕著な場合は野馬堀と呼称されている。他にも、牧の一部を区切る中土手、野馬捕り時に野馬を追い込む補助のための勢子土手、捕込の土手などの種類がある。なお、構造により、堀を掘削した排土を片側に積み上げた1重土手、堀を掘削した排土を両側に積み上げた2重土手、堀を2本にして掘削した排土を両側に積み上げた3重土手、堀を3本にして掘削した排土を両側に積み上げた4重土手も所在していたようである。また、馬の逃亡防止や行人の監視のため、木戸も設けられており、例えば草深木戸や神々廻木戸のように現在も地名を残している。野馬を捕獲・選別するための捕込の場所については、白井市十余一に捕込附、捕込向の字名が残ることから、この付近と推定されるが土手は残っていない。川上家文書（白井町史 史料集1）によれば、捕込、分け込、溜込の3区画からなり、大きさは、捕込は南北20間、東西20間、分け込は南北18間、東西18間、溜込は南北20間、東西16間と記載されている。往事の姿は、明治3（1870）年に作られた白井市指定文化財「印西牧場之真景図」の屏風絵に忍ぶことができる。

小金牧の中の印西牧以外でも、千葉県北総地区に設置された小金・佐倉牧に関連する遺構（野馬除土手・野馬堀・捕込）は都市化の波にのまれ、すでにその形が失われて久しい。通常野馬除土手というと高さ2m～3m、幅4mほどの立派なものを想像するであろうが、今回調査した印西牧野馬除土手は、高さ1m、幅2mほどで、近くに行かないとわからない程度である。しかしながら、慶長19（1614）年に江戸幕府が開墾して以来、寛文・延宝期（1661年～1681年）、享保期（1716年～1736年）の新田開発、明治期、太平洋戦争後の開拓、昭和30年代以降の高度経済成長に伴う開発によっても、優に400年にわたって残ってきた野馬除土手である。





第2圖 印西牧範圍圖 (陸軍迅速圖 1/20,000 明治20年)

0 1000 2000 3000 4000 5000 6000 7000 8000 9000 10000





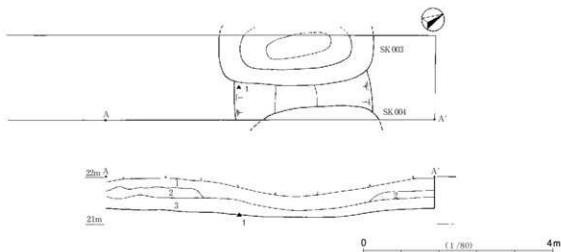
第3図 野馬除土手周辺地形図

## 第2章 遺構と遺物

### 旧石器時代

#### 出土状況（第4図）

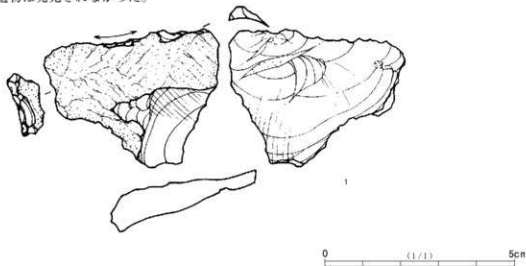
トレンチ14内の北端部で長軸を南北に持つシシ穴状土坑SK003が検出され、遺構写真を撮影するための清掃中に土坑の南東部の近接する地点から、黒曜石の剥片が出土した。出土地点は、野馬除土手の堀に長さ55.0m、幅5.0m、深0.6mほどで、「シシ穴」或いは「鹿落とし穴」といわれる陥穴状の土坑列群が検出された凹地SX004の底面直下で、立川ローム層の最上層である第Ⅲ層上面である。



第4図 トレンチ14内Ⅲ層旧石器時代遺物出土状況

#### 遺物（第5図、図版8）(232-002-T14-0001)

1点のみであるが、トレンチ14で黒曜石製の加工痕のある剥片が出土した。遺構内からの出土であるが、産出層準は第Ⅲ層の上部である。剝離面は風化して光沢が鈍く、旧石器時代の遺物と認定した。周辺を精査したが、関連遺物は発見されなかった。



第5図 石器実測図

剥片は、背面に大きく角礫原礫面を残した横長不整形で、底縁と側縁の交差する部分に短い二次加工痕が認められる。この部分の刃角はほぼ直角である。また、打面に接する側縁にも部分的に刃こぼれが観察される。この部分の縁辺角は45度である。腹面には打縮が発達し、裂痕も付随するので、ハード・ハンマーによる加撃によって生産されたものである。打面に接して微細な剥離痕が集中するが、これはテクニカルな調整剥離痕ではなく、加撃時に生じた偶発的なハジケであろう。剥片の最大長は33.5mm、最大幅は43.9mm、最大厚は14.2mmである。原石消費の初期段階の不整形剥片であるが、廃棄されず道具として機能している。なお、黒曜石は透明な部分と漆黒の部分が帯になり、非常に良質なものである。産地同定は実施できなかったが、信州産と推測される。

## 縄文時代

### 陥穴状土坑 SK001 (第13図、図版6)

トレンチ11内の中央で検出した。その形状からいわゆる「陥穴」といわれる土坑である。楕円形状のプランを呈し、大きさは長軸2.0m、短軸1.4m、検出面からの深さ1.9mを測る。底面は、長軸0.9mを測り、断面は掘り鉢状を呈する。調査は、安全対策のため、半截にとどめた。長軸を南北方向に持ち、南側をSD004道跡により切られている。土層観察から、SX003野馬除土手の北から2番目の土手下、黒色旧表土層下の暗褐色土層から掘り込まれている。遺物は、出土していない。

## 近世

### 野馬除土手 SX001 (第6・14図、図版2)

調査区の東端に所在する。2重の土手を持ち、SD001溝を掘削した排土を両側に積み上げて、構築している。全体形状は「L」字状に直角に曲がり、南側の土手は、東西方向に直線状に長さ20.0m、幅2.0m、高さ0.8mを測る。西端は、澤山の泉湧水地点谷頭斜面部で消滅する。北側の土手は、現況では確認できなかった。西側の土手は南側の土手接続地点から南北方向に直線状に長さ40.0m、幅2.0m、高さ0.8mを測る。東側の土手は南北方向にやや弧状に東に曲がり、長さ28.0m、幅2.0m、高さ0.5mを測る。北端は現代の造成法面で消滅する。南端は、澤山の泉湧水地点谷頭斜面部で消滅する。従って、牧の内側にあたる東側の土手の方が高さが低く、溝を挟んで、牧と村の境の西側の土手の方が高い。

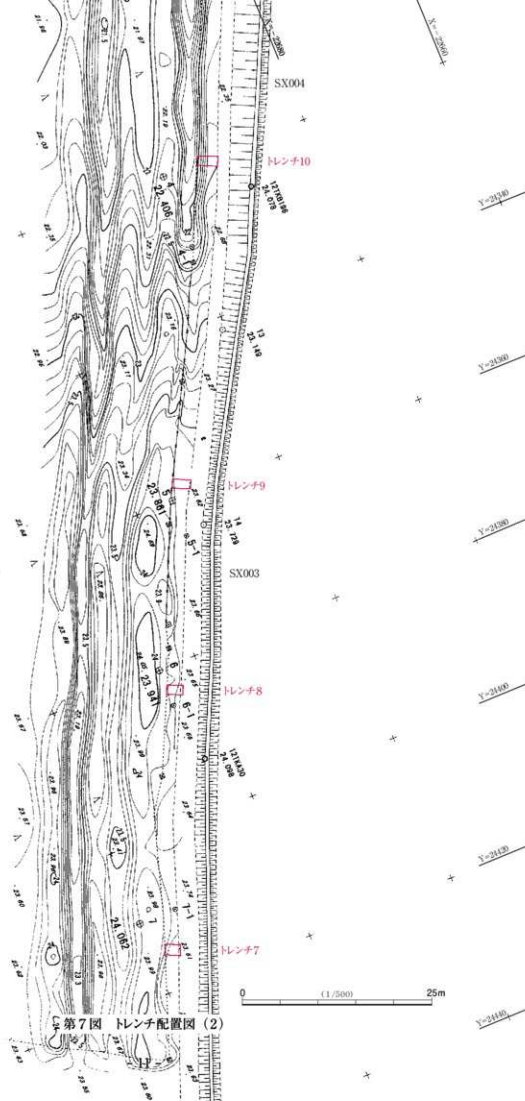
土層断面観察及び土手の構築方法の確認のため、トレンチ1・2を設定した。見かけ上、東側の土手は、SD001溝覆土上面から、幅2.0m、高さ0.5mほど、西側の土手は、幅3.0m、0.3mほど高くなっている。トレンチ1の土層断面観察から、黒色の旧表土層は、東から西へと緩やかに傾斜し、東側で幅2.0m、高さ0.3m、西側で幅3.0m、高さ0.3mの盛土が観察された。トレンチ2では、黒色の旧表土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、SD001北側の盛土は観察できなかった。南側の土手は、立木のため調査は実施できなかったが、見かけ上の幅1.2m、高さ0.6mを測る。東西方向に構築された溝SD001より北側は、現代の造成工事により地形が改変されている。遺物は、出土していない。

### 野馬除土手 SX002 (第6・14図、図版2)

SX001の西側に所在する。地形測量の結果、2重の土手を持ち、SD002溝を掘削した排土を両側に積み上げて、構築している。全体形状は「L」字状に直角に曲がり、SD002の北側の土手は、東西方向に直

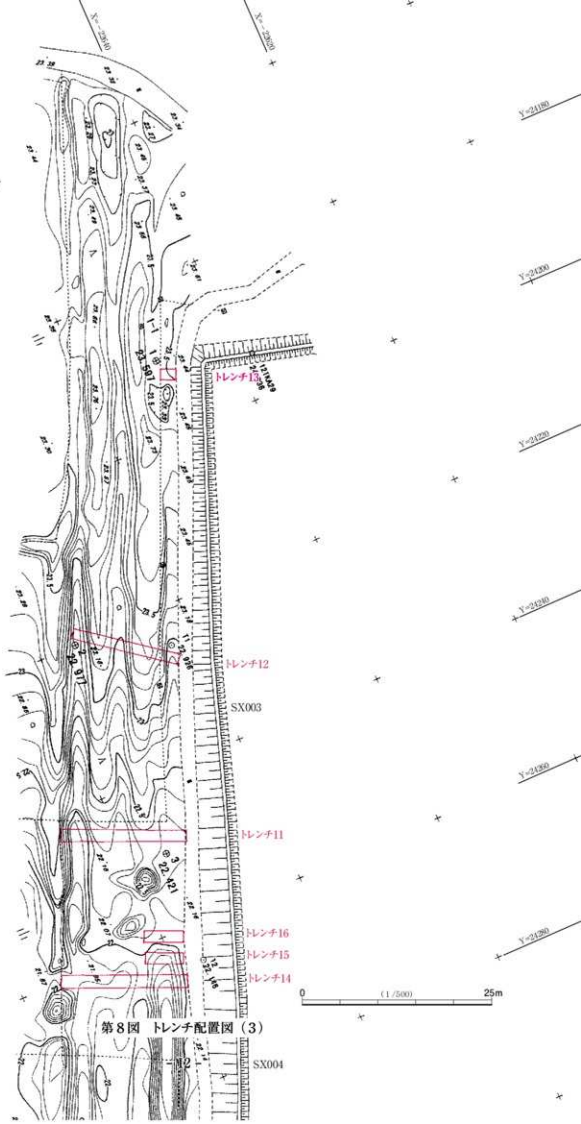


第6図 トレンチ配置図(1)



第7図 トレンチ配置図(2)





第8図 トレンチ配置図(3)

SX004

SX003

線状に伸び、長さ 28.0 m、幅 1.8 m、高さ 0.5 m を測る。東端は澤山の泉谷頭斜面部で消滅する。南側の土手は、東西方向に直線状に伸び、長さ 40.0 m、幅 2.4 m、高さ 0.5 m を測る。東端は澤山の泉谷頭斜面部で消滅する。西側の土手は、北側の土手の接続点から南北方向に直線状に長さ 40.0 m、幅 2.0 m、高さ 0.5 m を測る。南端は調査区境の赤道まで 8.0 m の地点で消滅する。東側の土手は、南側の土手接続点から南北方向に直線状に、長さ 48.0 m、幅 2.5 m、高さ 0.8 m を測る。従って、牧の内側にあたる東側の土手の方が高さが低く、溝を挟んで西側の牧と村の境の土手の方が高い。

トレンチ 3・4 の土層断面観察では、北側の土手の盛土は観察できなかった。昭和 40 年代のゴルフ場造成工事及び撤去工事に伴う攪乱が著しい。トレンチ 5 では、西側の土手の盛土状況が観察でき、0.5 m ほどソフトローム層を積み上げている様子が観察できた。トレンチ 6 の土層断面観察から、黒色の旧表土層は、西から東へと緩やかに傾斜し、見かけ上の西側の土手は、SD002 溝覆土上面から、幅 2.0 m、高さ 0.3 m ほど、東側は、幅 4.0 m、0.1 m ほど高くなっている。盛土は、表土層と区別がつかなく、確認できない。遺物は、出土していない。

#### 野馬除土手 SX003 (第 7・8・14 図、図版 3・4)

SX002 の西側に所在する。地形測量の結果、見かけ上 3 重の土手を持ち、北北西から南南東方向へ直線状に長さ 275.0 m (調査区内) を測る。調査区西端に隣接する 4 m 幅の白井市道をはさみ、さらに西側の先手の湧水地点谷頭の斜面まで約 50 m (調査区外) にわたって続いている。

北から 1 番目の土手は、東端部から直線状に長さ 190.0 m、幅 5.0 m、高さ 0.6 m を測り、23.0 m ほど途切れ、直線状にさらに長さ 83.0 m、幅 4.0 m、高さ 0.5 m を測る。北から 2 番目の土手は、東端部から直線状に長さ 133.0 m、幅 3.5 m、高さ 0.5 m を測り、30.0 m ほど途切れ、直線状にさらに長さ 107.0 m、幅 3.5 m、高さ 0.6 m を測る。

野馬除土手は、一般的に野馬堀を掘削した排土を両側に積み上げて、2 重の土手を構築していることが多い。同様に、当土手の北から 1 番目の土手と 2 番目の土手は、SD003 野馬堀の掘削排土を両側に積み上げて構築されていた。トレンチ 12 の土層断面観察から、一番北側の土手は、幅 3.0 m、高さ 0.3 m ほど暗褐色土のハードロームブロックを主体とする盛土層が認められた。

北から 3 番目の土手は、東端部から直線状に長さ 147.0 m、幅 3.5 m、高さ 0.5 m を測り、8.0 m ほど途切れ、直線状にさらに長さ 118.0 m、幅 3.5 m、高さ 0.6 m を測る。北側に所在する SD004 道跡の整備に伴って、掘削排土・浚深排土を両側に積み上げた結果、作られたものである。

現況で、北から 1 番目の土手は、西端から 97.0 m から 120.0 m 地点で、長さ約 23 m にわたり土手が途切れている部分がある。産業廃棄物等の不法投棄が認められることから、現代の整地作業により失われたと思われる。北から 2 番目、3 番目の土手も同様に途切れている部分がある。

#### 凹地 SX004 (第 7・8・10・11・14 図、図版 4・7・8)

SX004 は、調査区西端の市道から 110.0 m の地点で、SX003 3 重の野馬除土手の北から 1 番目の土手中央部の北側に東西方向に平行して長さ 55.0 m、幅 5.0 m、深さ 0.6 m ほどの範囲で窪地状に凹み、断面は、幅の広い「U」字状を呈する。この凹みに直交するように設定したトレンチ 10・14・15 の北端から、いわゆる「シシ穴」或いは「鹿落とし穴」といわれる大型の陥穴状の土坑が 4 基検出された。シシ穴状土坑

は、西からトレンチ 15 内に 1 基、隣接するトレンチ 14 内に 2 基検出した。さらに東に 20 m ほど離れたトレンチ 10 の南端部からも 1 基検出し、この凹地内に長軸を南北方向にとるシシ穴状土坑が列状に並んで構築されていたものと思われる。凹地の西端にトレンチ 16 を設定したところ、ここからはシシ穴は検出されなかった。従って、トレンチ 16 より東側の凹地の中のみシシ穴が所在する可能性が高い。遺物は、出土していない。

#### 溝 SD001 (第 9・12 図、図版 4・5)

トレンチ 1 の確認調査により SX001 野馬除土手の 2 重の土手間で検出した。確認のため、トレンチ内だけ完掘した。大きさは幅 2.6 m、深さ 1.0 m を測る。断面形状は「U」字状を呈する。溝底部には、長軸 1.7 m、短軸 0.6 m (確認できた範囲)、深さ 0.4 m の土坑状の掘り込みが検出された。トレンチ外は調査できなかったが、他遺跡の類例から、溝底部に楕円形の土坑状の掘り込みが連続して構築されるタイプと推定される。検出地点は、トレンチ中央付近である。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。遺物は、出土していない。

#### 溝 SD002 (第 7 図、図版 5)

トレンチ 6 の確認調査により SX002 野馬除土手の 2 重の土手間から検出した。確認のため、トレンチ内だけ完掘した。大きさは幅 2.2 m、深さ 0.8 m を測る。断面形状は、「U」字状を呈する。溝底部には、長軸 1.2 m (確認できた範囲)、短軸 1.3 m、深さ 0.3 m、長軸 1.3 m (確認できた範囲)、短軸 0.3 m (確認できた範囲)、深さ 0.2 m の土坑状の掘り込みが 2 基検出された。トレンチ外は調査できなかったが、他遺跡の類例から、溝底部に楕円形の土坑状の掘り込みが連続して構築されるタイプと推定される。検出地点は、トレンチ中央付近である。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。遺物は、出土していない。

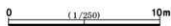
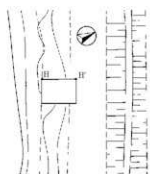
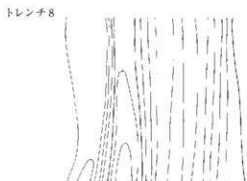
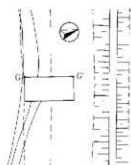
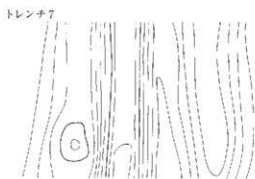
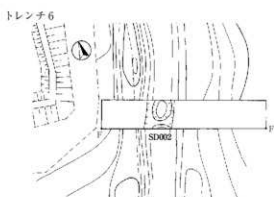
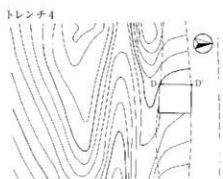
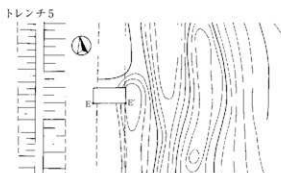
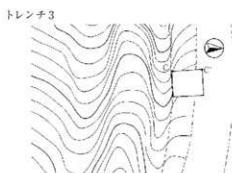
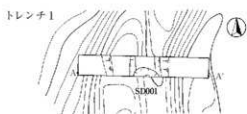
#### 野馬堀 SD003 (第 10・11・12 図、図版 6・7)

トレンチ 11・12・14 の確認調査により SX003 野馬除土手の 3 重の土手のうち、北から 1 番目の土手と 2 番目の土手の間で検出した。確認のため、トレンチ内だけ完掘した。トレンチ 11 内では、幅 3.1 m、底部幅 1.0 m、深さ 1.3 m を測る。トレンチ 12 内では、幅 3.0 m、底部幅 0.8 m、深さ 1.4 m を測る。トレンチ 14 内では、大きさは幅 3.0 m、底部幅 0.7 m、深さ 1.3 m を測る。断面形状は、逆台形状を呈する。土層断面観察からは、何度も浚って掘り返された痕跡が認められなかったため、ある程度埋設する前に定期的に堀内の堆積土の清掃を実施し、堀を維持していた様子が窺える。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。検出地点は、トレンチ北端寄りである。遺物は、出土していない。

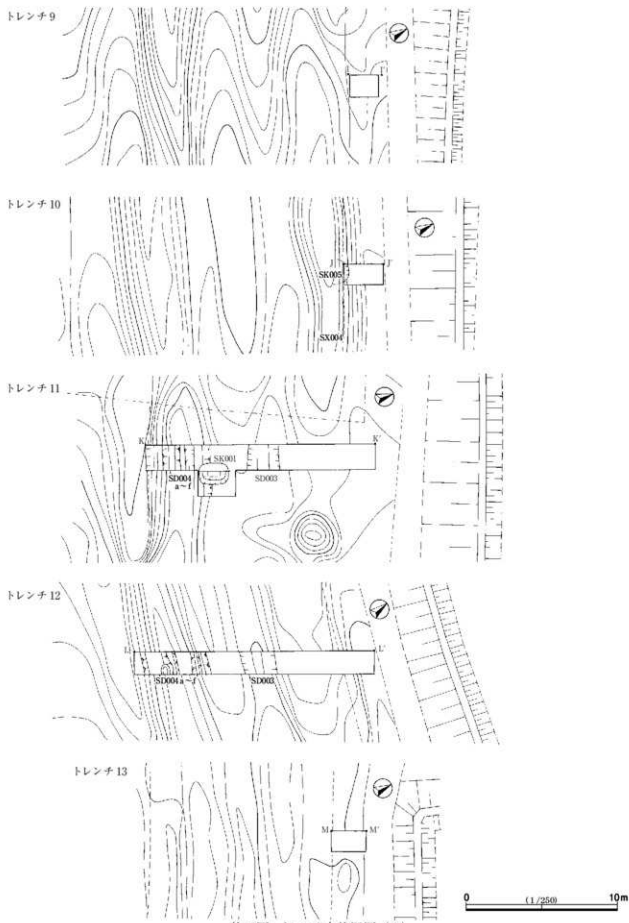
#### 道跡 SD004 a～f (第 10・11・12 図、図版 6・7)

トレンチ 11・12・14 内の確認調査により SX003 野馬除土手の 3 重の土手のうち、北から 2 番目の土手と 3 番目の土手の間で検出した。現況は、赤道となっており、見かけ上道路面は周囲から幅 3.5 m、深さ 0.6 m ほど凹んでいて、先神谷津から澤山谷津へと続く道となっている。

トレンチ 11 内では、上部幅 4.8 m、底部幅 3.3 m、深さ 0.8 m を測る。トレンチ 12 内では、上部幅 5.1 m、



第9図 トレンチ内状況図(1)



第10図 トレンチ内状況図(2)

底部幅 3.6 m、深さ 0.6 m を測る。トレンチ 14 内では、掘削後大きさは上部幅 5.2 m、底部幅 2.8 m、深さ 1.2 m を測る。断面形状は、幅の広い「U」字状を呈する。土層断面観察からは、南北に位置をずらしながら、何度も浚って掘り返された痕跡が認められた。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。トレンチ 11 内では 6 回ほど、トレンチ 12 内では 5 回ほど、トレンチ 14 内では 5 回ほど掘り直されていることが確認できた。遺構底面は、踏み固められて硬化していたことから、野馬場ではなく道跡と判断した。検出地点は各トレンチの南端付近で、確認のためトレンチ内だけ完掘した。遺物は、出土していない。

#### シシ穴状土坑 SK002 (第 11・12・13 図、図版 8)

トレンチ 15 内の北端で検出した。いわゆる「シシ穴」あるいは「鹿落とし穴」といわれる大型の陥穴状の土坑である。楕円形状のプランを呈し、長軸 3.6 m、短軸 1.3 m (確認できた範囲)、確認面からの深さ 2.0 m を測る。長軸を南北方向に持ち、野馬除土手 SX003 の北から 1 番目の土手北側裾に構築された SX004 凹地の中の西端から検出した。SK003 とは 1 m 程離れて、構築されている。遺物は、出土していない。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。検出面から深さ 0.6 m くらいの土層には、宝永 4 (1707) 年の富士山の噴火による火山灰と思われる黒色の荒い砂質層が検出された。少なくともシシ穴状土坑の 2/3 以上が埋没してから火山灰が降下することになる。

#### シシ穴状土坑 SK003 (第 11・12・13 図、図版 7・8)

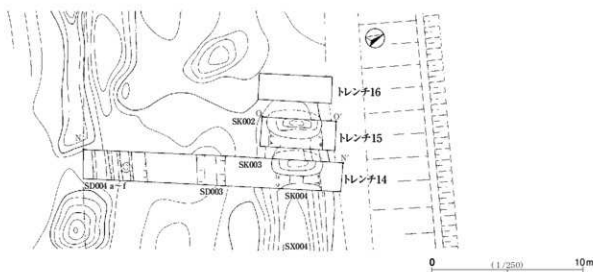
トレンチ 14 内の北端から検出した。いわゆる「シシ穴」あるいは「鹿落とし穴」といわれる大型の陥穴状の土坑である。楕円形状のプランを呈し、長軸 3.3 m、短軸 0.8 m (確認できた範囲)、深さ 1.4 m (確認できた範囲) を測る。安全対策のため、遺構底面までは完掘していない。長軸を南北方向に持ち、野馬除土手 SX003 の北から 1 番目の土手の北側裾に構築された SX004 凹地の中から検出した。SK002 とは 1 m ほど、SK004 とは 0.4 m ほど離れて構築されている。遺物は、出土していない。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。宝永の火山灰は、SK002 と同様に検出面から深さ 0.6 m ほどの土層で検出されている。

#### シシ穴状土坑 SK004 (第 11・13 図、図版 7)

トレンチ 14 内の北端東側で検出した。いわゆる「シシ穴」あるいは「鹿落とし穴」といわれる大型の陥穴状の土坑である。確認できた大きさは長軸 2.2 m、短軸 0.2 m を測るが、プランを検出したのみである。SK003 と同様な土質である。長軸を南北方向に持ち、野馬除土手 SX003 の北から 1 番目の土手の北側裾に構築された SX004 凹地の中から検出した。SK003 とは 0.4 m ほど離れて構築されている。

#### シシ穴状土坑 SK005 (第 10・12 図、図版 6)

凹地 SX004 の北側に隣接して設置したトレンチ 10 内の南端で検出した。いわゆる「シシ穴」あるいは「鹿落とし穴」といわれる大型の陥穴状の土坑と思われる。トレンチの南側は調査区外のため、確認できた大きさは長軸 0.7 m、短軸 0.2 m を測り、楕円形の落ち込みプランの一部を検出した。長軸は南北方向に持つものと思われ、SK003 と同様な土質である。土層断面観察から、黒色の旧表土層から掘り込んでいる。SK003 から東に約 20 m ほど離れた地点から検出したことにより、凹地 SX004 の中に、長軸を南北にとる楕円形のシシ穴状土坑が連続して構築されている可能性が高い。遺物は、出土していない。



第11図 トレンチ内状況図(3)

### 第3章 まとめ

今回の印西牧野馬除土手の調査から、従来の遺跡分布地図には当該土手の周辺に近世野馬土手の所在のみが周知されていたが、当該地が旧石器時代・縄文時代の遺跡、及び近世の牧跡として使用されていたことがわかった。旧石器時代石器出土地点1ヶ所、縄文時代陥穴状土坑1基、近世野馬除土手1基、野馬除土手に伴う溝2条・野馬駆1条・道跡1条・道に伴う土手1条・シシ穴状土坑4基・シシ穴状土坑列に伴う凹地1ヶ所が検出された。

#### 旧石器時代

信州産と思われる加工痕のある黒曜石剥片が1点だけ出土した。出土層位は、立川ローム層Ⅲ層上面である。原石消費の初期段階の不整形剥片であることから、キャンプサイトとして、信州方面から持ち込んだ黒曜石で道具を製作していた地点と思われる。この地点の周辺では、旧石器時代の遺物は採取されておらず新知見となるものである。

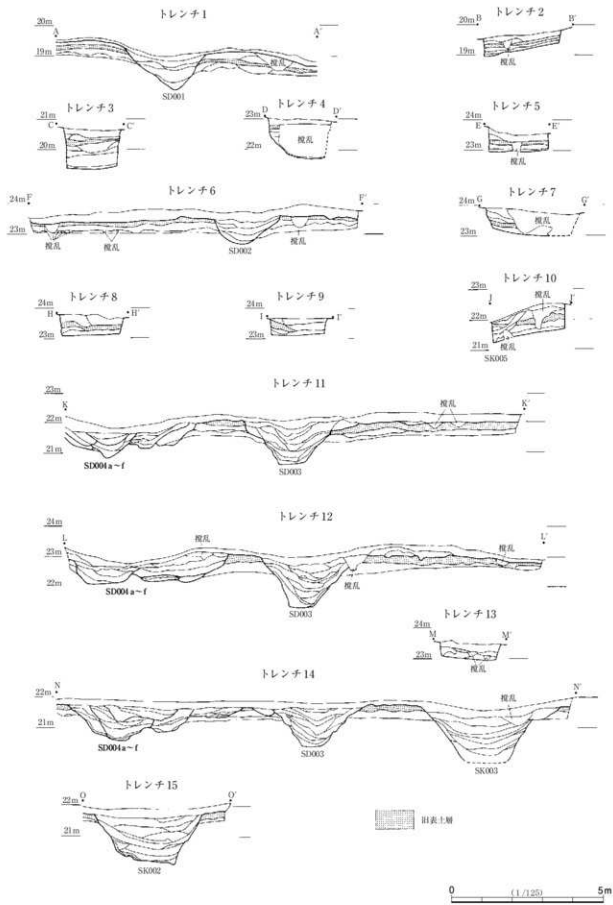
#### 縄文時代

その形状から、陥穴と考えられる土坑を1基検出した。遺物を伴わないため、時期の判別はできない。この周辺では、縄文時代の遺構は確認されており新知見となるものである。

この地点の周辺では、当該期の土器の出土や遺構の検出が希薄で、生活の痕跡が見られないことから、狩猟の場として使用したものと思われる。

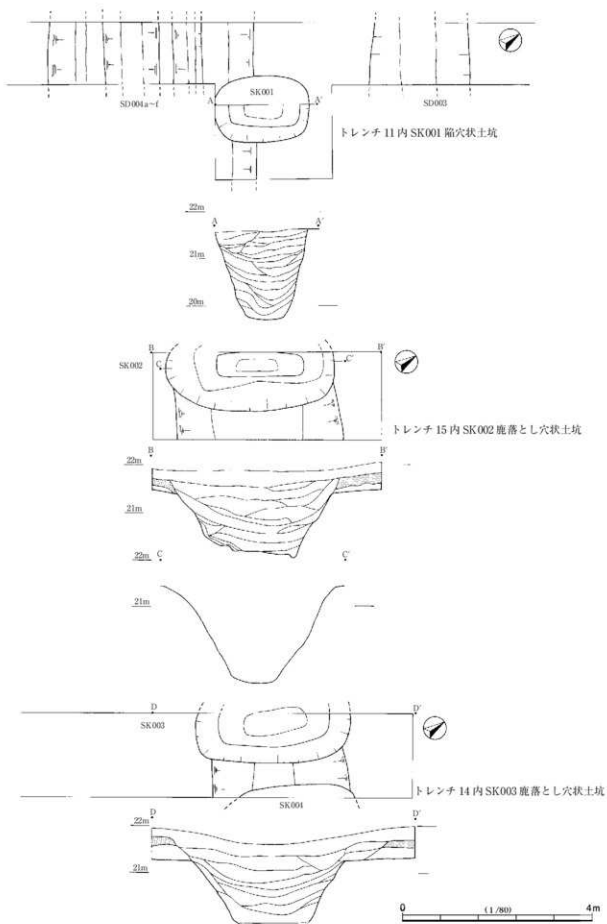
#### 近世

今回調査した印西牧野馬除土手は、印西牧と谷田村管理地とを区切る自普請土手であることが判明した。



第12図 トレンチ土層断面図





第13図 トレンチ内土坑実測図

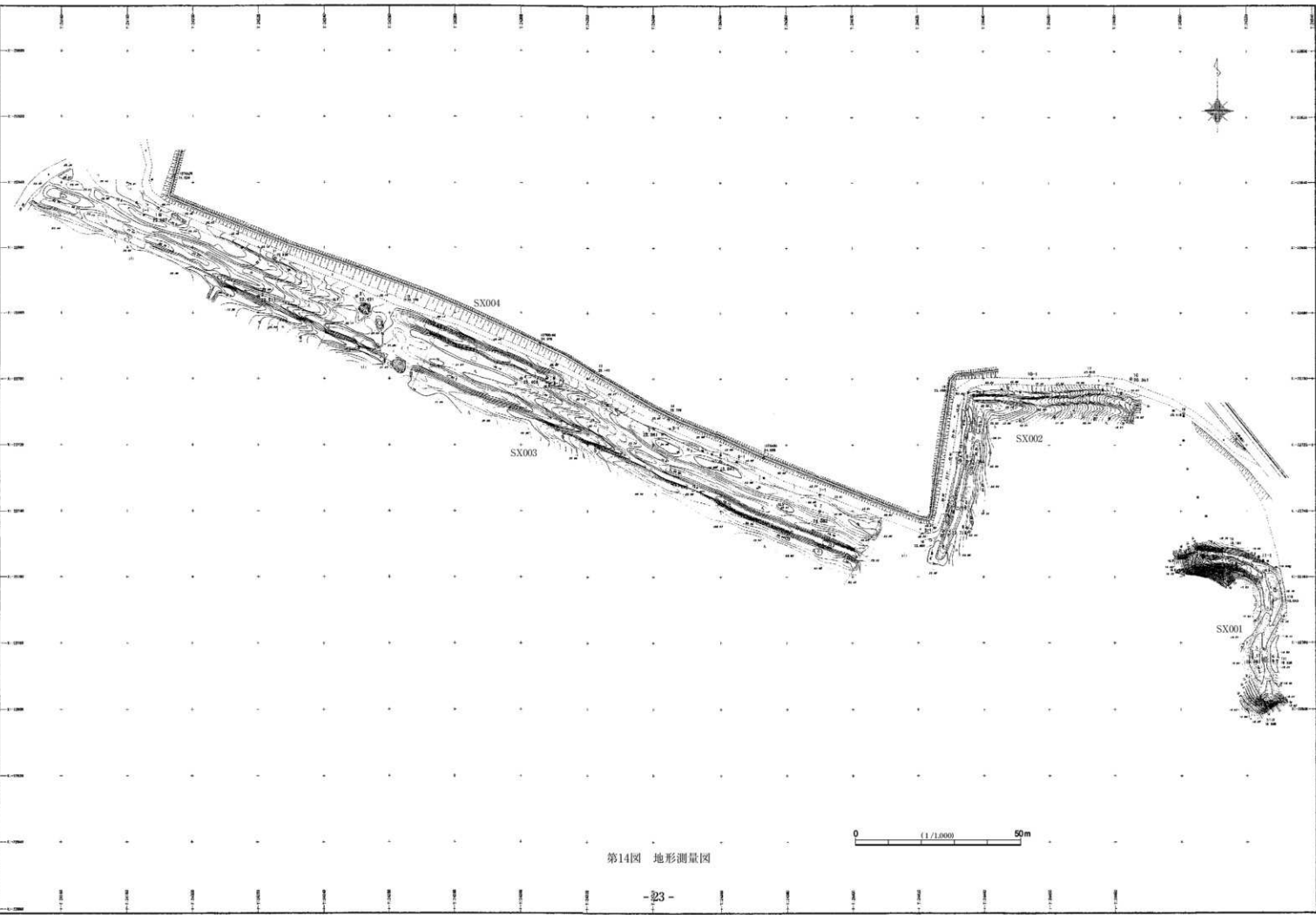
寛文12(1672)年頃の小金牧大絵図を見ると、すでにこの野馬除土手が境界となっていることがわかる。絵図によれば牧の内側は、薄緑色に塗られた御用地(牧として利用する土地)となっている。牧の外側は白色で谷田村が管理する秣場、あるいは年貢を払って利用を請け負った草刈場等の場所であったと思われる。当該土手のある地点は、現在の白井市清戸南割と谷田新山の字境に沿っている。台地上を区画するこの野馬除土手の東西両端部には、神崎川によって開析された急峻な崖面を呈する谷頭に面し、野馬が逃げ出せないようになっている。また、土手沿いに進めば、西側の先神の湧水地点まで行くことができるので、野馬の水飲み場に利用されていた可能性が高い。東側の「澤山の泉」湧水地点は、古代に東征してきたヤマトケルが手をひたした伝説に伴う「御手洗の泉」として信仰され、石宮が祀られていることから、野馬の水飲み場に利用されていた可能性は低い。この宮は、明治20(1887)年の陸軍迅速図にも記載されている。

東西方向の長い3重の野馬除土手SX003のうち、北から1番目と2番目の土手は、野馬堀SD003を掘削した際の排土を北側と南側に積み上げて、構築したものである。小金牧大絵図をみると、谷田村が自ら普請を願って作成した自普請土手として白色に色分けされている。1番南側の土手は、この野馬除土手沿いの南側に作られた道を何度も渡って作り直し、渡排土を道の南側に土手状に積み上げたものと思われる。このため、見かけ上、3重の土手に見える。SX003土手の東端部とSX003の東側に所在するSX002野馬除土手の南北方向の土手の南端部とは、接続はしていない。この間約25mにわたり、土手が遺存していないが、これは現代の整地作業により失われたと思われる。この地点は今回調査区域外であるが、トレンチ11・12・14で検出した野馬堀SD003の東側延長方向の当該箇所が約0.2mほど凹んでいることから、SX002土手の南端部付近までは、曲がらずに直線状に伸びているものと思われる。また、道跡SD004の東側延長方向の当該箇所が約0.5mほど凹んでいることから、曲がらずに直線状に澤山の泉湧水地点谷頭の斜面まで伸びていたものと推定される。従って、SX002南端部に接する地点まで土手があったとすれば、本来の2重土手は、調査区及び調査区外も含めて、直線状に約345mほど構築されていたものと思われる。東側の澤山の泉湧水点を囲むように所在する2重の野馬除土手SX001・002は、溝SD001・002を掘削した際の排土を両側に積み上げて、構築したものである。字境であることから、土手上には密に杉や檜の原木が植林されている。野馬除土手SX002に伴う溝SD002の形状は、断面「U」字状の底に土坑状の掘り込みを有するタイプで、野馬除土手SX003に伴う野馬堀SD003の形状は、幅広く深い断面逆台形状と異なるタイプであり、同時期に構築されたものかは不明である。周辺の調査があれば、その成果を今後に期待したい。

凹地SX004は、調査区西端の白井市道から110.0mほどの地点でSX003の3重の野馬除土手の北から1番目の土手中央部裾の北側に東西方向に平行に長さ55.0m、幅5.0m、深0.6mほどの範囲で窪地状に凹んでいる。断面は、幅の広い「U」字状を呈する。この凹地は、野馬除土手裾の牧の内側に構築されており、その構造は、この凹地の中いわゆる「シシ穴」と呼ばれる大型陥穴状土坑を並列して多数構築していると推定される。SX004の利用方法として考えられるのは、牧を管理している江戸幕府が野付村の住民を動員し、野馬を襲う狼や野犬、あるいは小動物などを追い込んで、駆除するために使用した施設であると思われる。シシ穴状土坑SK002・003の土層断面観察から、牧開設当初には機能していたが、宝永(1707)4年の富士山の噴火の頃には2/3ほど埋没し、その機能は失われていたと思われる。

参考文献

- 1 佐倉市『佐倉市史 巻2』佐倉市 1973
- 2 西山太郎『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書4 -一雨宮古遺跡-』財団法人千葉県都市公社 1976
- 3 松下邦夫『松戸市史 中巻 近世編 小金牧』松戸市 1978
- 4 鈴木晋二男『のびろし紀行 -白井町の文化誌-』鈴木晋二男 1979
- 5 鈴木定明・清藤一編『松戸市五香六美元山所在馬土手』財団法人千葉県文化財センター 1982
- 6 松下邦夫『松戸歴史案内 改訂新版』郷土史出版 1982
- 7 白井町『白井町史 資料集1』白井町史編纂室 1984
- 8 赤川道行『松戸市・沼南町野見塚新田所在野馬土手 -高柳土地西整理に伴う埋蔵文化財調査報告書1-』財団法人千葉県文化財センター 1988
- 9 田村純・土守香明『松戸市野見塚遺跡・前原1遺跡・根之俣台遺跡・中内遺跡・中時遺跡・新橋台1遺跡・串崎新田東里所在野馬除土手 -北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書3-』財団法人千葉県文化財センター 1989
- 10 橋本勝雄『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書9 -白井根塚群・房沢シヤナ遺跡（CN105）・大木戸祝十三塚（CN412）・泉遺跡（CN614）・鹿黒遺跡（CN615）・五本松遺跡（224-001）・上栗貝台遺跡（224-002）・落山遺跡（224-003）-』財団法人千葉県文化財センター 1989
- 11 青山博・西山太郎『白井町富士地先野馬土手 -白井町富士地先宅地造成予定地内埋蔵文化財調査-』財団法人印旛郡都市文化財センター 1990
- 12 印西町『印西町史 史料集 近世編3』印西町史編纂室 1992
- 13 印西町『印西町史 史料集 近世編4』印西町史編纂室 1993
- 14 印西町『印西町史ガイドブック 印西市民会館』印西町史編纂室 1993
- 15 土屋潤一郎『原宿考古学ライブラリー8 歴史時代(2)』財団法人千葉県文化財センター 1994
- 16 嶋田浩司・小林信一『關道山田台大塚白里埋蔵文化財調査報告書1 -大塚白里町一本松遺跡・山田台No.6-2遺跡・東京都山田本春遺跡・山田新田所在馬土手』財団法人千葉県文化財センター 1996
- 17 松下邦夫『流山市史研究 第13号 近況小金牧の実蹟』流山市 1996
- 18 柳原宏二『本埜村大門遺跡 -本埜アケセ工設埋蔵文化財調査報告書-』財団法人千葉県文化財センター 1996
- 19 財団法人千葉県文化財センター『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) -東葛飾・印旛地区(改訂版)-』財団法人千葉県文化財センター 1997
- 20 白鳥亨『鎌ヶ谷市初宮3丁目所在馬土手 -船橋・我孫子バイパス建設埋蔵文化財調査報告書-』財団法人千葉県文化財センター 1997
- 21 神谷健隆『沼南町高柳新田所在馬土手 -高柳西地区埋蔵文化財調査報告書-』財団法人千葉県文化財センター 1998
- 22 森原忠一『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書14 -印西市鳴神山遺跡Ⅱ・白井谷遺跡-』財団法人千葉県文化財センター 2000
- 23 白井市『広報しろい。2000.04.15 小金牧の牧土資料』白井市役所 2000
- 24 青木史吉『小金牧 野馬土手は決まっている』滋書房出版 2001
- 25 今泉雄『印西市新井堀1遺跡・新井堀1野馬土手 -印西市道02-0026号線道路改良に伴う埋蔵文化財調査報告書-』財団法人千葉県文化財センター 2002
- 26 西川博・渡邊由雄『主要地方道成田田尾線16 -芝山町大里所在馬土手・宝馬遺跡93-77地点』財団法人千葉県文化財センター 2002
- 27 西川博『西三里塚第2次発掘埋蔵文化財調査報告書1 -成田市三里塚所在馬土手-』財団法人千葉県文化財センター 2003
- 28 谷塚栄一『泉野野馬塚 -千葉北地区泉野新田野馬塚埋蔵文化財調査-』財団法人千葉県文化財センター 2003
- 29 青木史吉『小金牧を歩く』滋書房出版 2003
- 30 天下井忠『鎌ヶ谷市史研究 第16号 小金牧給飼から見る鎌ヶ谷市城の変遷』鎌ヶ谷市 2003
- 31 小笠原敏『印西市野馬遺跡 -（仮称）平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書1』財団法人千葉県文化財センター 2004
- 32 石戸啓夫『空想郷土地区埋蔵文化財調査報告書1 -白井町大里馬土手・柳吉野遺跡-』財団法人千葉県文化財センター 2004
- 33 鈴木晋二男『のびろし紀行 白井の文化遺産』鈴木晋二男 2004
- 34 坪井敏哉『たいわ -語り伝える白井の歴史-21 白井市内の野馬除け土手(編)』白井市郷土史の会 2004
- 35 天下井忠『たいわ -語り伝える白井の歴史-21 印西牧場の真景園』白井市郷土史の会 2004
- 36 石戸啓夫『国で見る白井の変遷(白井の古図1)』明治前期の十ヶ村給飼 白井市郷土資料館 2004
- 37 石戸啓夫『白井の地名 -ニュータウン開発以前の字地名-』白井市郷土資料館 2005
- 38 石戸啓夫『国で見る白井の変遷(白井の古図2) 天保8年平塚村』白井市郷土資料館 2005
- 39 石戸啓夫『国で見る白井の変遷(白井の古図3) 文化13年白井本戸集落図』白井市郷土資料館 2005
- 40 香取正彦『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書18 -本埜村角田台遺跡(弥生時代以降)-』財団法人千葉県教育振興財団 2006
- 41 香取正彦『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書18 -本埜村角田台遺跡(弥生時代以降)-』財団法人千葉県教育振興財団 2006
- 42 香取正彦『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書19 -白井市清川遺跡・印西市古新田遺跡-』財団法人千葉県教育振興財団 2006
- 43 千葉県『千葉県の歴史 通史編 近世1』財団法人千葉県史料研究財団 2007
- 44 宮本行・高橋博文・田形孝一『香取正彦『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書21 -印旛村向辺田遺跡-』財団法人千葉県教育振興財団 2008
- 45 高花宏行『平成20年度企画展 清川の泉と電神伝説』白井市郷土資料館 2008
- 46 天下井忠『鎌ヶ谷市史研究 第22号 小金中野牧・下野牧の構造と野馬遺跡』鎌ヶ谷市 2009
- 47 西川博『平成21年度企画展 印西牧場の真景園の世界 -印西牧で行われた野馬捕りの様子を伝える展覧会-』白井市郷土資料館 2009
- 48 島田純之『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書22 -印西市和泉北第1遺跡・大森野野馬塚・野野所在野馬土手・武西谷遺跡-』財団法人千葉県教育振興財団 2009
- 49 森原忠一『千葉県印西市泉野新田大木戸野馬遺跡 -平成22年度印西市道26-005号線道路新設事業に伴う埋蔵文化財調査業務委託-』財団法人印旛郡都市文化財センター 2010
- 50 黒澤昭『成田市大神峰中央所在野馬土手 -早瀬道路改良(幹線道路網整備)委託埋蔵文化財調査報告書-』財団法人千葉県教育振興財団 2012
- 51 佐々木友哉『印西の歴史 第6号 小金印西牧の開発と野馬土手』印西市教育委員会 2012
- 52 西川博孝・本原高弘『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書28 -白井市復山谷遺跡(上層)・印西市泉北第3遺跡(上層)・荒野前遺跡(上層)-』公益財団法人千葉県教育振興財団 2013
- 53 本原高弘『酒ヶ野町飯積上台遺跡1 旧石器時代・奈良平安時代中・近世 -酒ヶ野南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書2-』公益財団法人千葉県教育振興財団 2014
- 54 西川博孝『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書30 -印西市大割水遺跡・高橋所在野馬土手・向新田遺跡(2)・船尾白鶴遺跡2-(2)・鹿黒遺跡・白井市白井新田1号遺跡・清川2遺跡-』公益財団法人千葉県教育振興財団 2014
- 55 本原高弘『酒ヶ野町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧場本戸野馬土手 -酒ヶ野南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-』公益財団法人千葉県教育振興財団 2014



第14圖 地形測量圖

# 写 真 图 版



印西牧野屬除土手航空写真



調査前風景 (1)  
トレンチ1付近 北東から



調査前風景 (2)  
トレンチ3付近 東から



調査前風景 (3)  
トレンチ6付近 南西から

調査前風景 (4)  
トレンチ 13 付近  
北西から



調査前風景 (5)  
澤山の泉湧水地点  
南西から



調査前風景 (6)  
先神の湧水地点  
北東から







調査前風景 (7) トレンチ4付近 東南東から



調査前風景 (8) トレンチ7付近 北西から



調査前風景 (9) トレンチ10付近 南東から



調査前風景 (10) トレンチ12付近 北東から



調査前風景 (11)  
シンク状土坑列の凹地トレンチ14付近 南西から



調査前風景 (12)  
先陣の跡地地点へ続く地区外の野馬除土手 北東から



トレンチ1全景 東から



トレンチ1掘土層断面 北東から (SD001)



トレンチ1 溝土層断面 北東から (SD001)



トレンチ2 土層断面 東から



トレンチ3 土層断面 東から



トレンチ4 土層断面 東から



トレンチ5 土層断面 北から



トレンチ6 全景 西から



トレンチ6 溝土層断面 北東から (SD002)



トレンチ7 土層断面 南東から



トレンチ 8 土層断面、南東から



トレンチ 9 土層断面、南東から



トレンチ 10 土層断面、東から (SK005 検出)



トレンチ 11 全景、北北東から



トレンチ 11 野馬堀土層断面、東から (SD003)



トレンチ 11 道跡土層断面、東から (SD004a~f)



トレンチ 11 陥穴状土坑、北北東から (SK001)



トレンチ 11 陥穴状土坑土層断面、南から (SK001)





トレンチ12道跡土層断面 北東から (SD004a~f)



トレンチ12土層断面 北東から



トレンチ12野馬除土手盛土土層断面 東から



トレンチ13土層断面 東から



トレンチ14シン穴状土坑全景 北西から (SK003)



トレンチ14道跡土層断面 北東から (SD004a~f)



トレンチ14野馬堀土層断面 東から (SD003)



トレンチ14シン穴状土坑土層断面 北東から (SK003)



トレンチ15 シシ穴状土坑 北東から (SK003)



トレンチ15 シシ穴状土坑土層断面 東から (SK002)



トレンチ14・トレンチ15・トレンチ16 全景 北から



調査後風景 トレンチ14 付近道路 南から



トレンチ14内出土土層旧石器時代石器 (232-002-T14-0001)

出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しろいしいんざいまきのまよけどて							
書名	白井市印西牧野馬除土手							
副書名	千葉北部地区中48(桜台) 画地埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第755集							
編著者名	麻生正信							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦2016年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いんざいまきの 印西牧野 まよけどて 馬除土手	ちばけんしろいし 千葉県白井市 さくらだいご 桜台五丁目 738-6の1部 いんざ ほか	12232	002	35度 47分 54秒	140度 05分 55秒	20151201 ～20151228	6.600	宅地開発関連 事業に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
印西牧野 馬除土手	包蔵地 野馬土手	旧石器時代	石器出土地点	1ヶ所	石器	立川ローム層Ⅲ層 出土		
		縄文時代	陥穴	1基				
	近世	野馬土手 野馬堀 溝 道跡 シシ穴 凹地 土手	1基 1条 2条 1条 4基 1ヶ所 1条			小金五牧の内の印 西牧に所属する南 側境界の野馬除土 手である。		
要約	江戸幕府は、慶長19(1614)年に江戸周辺に軍馬養成と使役馬の供給を目的として、下総に小金・佐倉の二牧を幕府直轄の牧として設置した。今回調査した野馬除土手は、このうちの小金五牧に属する印西牧に関連する野馬除土手で、明治2(1869)年に廃止になるまで使用した印西牧と谷田村管理地とを区切る南側境界の自普請土手である。							

千葉県教育振興財団調査報告第 755 集

## 白井市印西牧野馬除土手

－千葉県北部地区中 48（桜台）画地理蔵文化財発掘調査報告書－

---

平成 28 年 3 月 25 日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団文化財センター
発 行	独立行政法人	都 市 再 生 機 構 首 都 圏 ニ ュ ー タ ウ ン 本 部 東京都新宿区西新宿 6 - 5 - 1
	公益財団法人	千 葉 県 教 育 振 興 財 団 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の 2
印 刷	株 式 会 社	ラ イ フ 千葉県成田市東和田 595 番地

---